

野球帽のつばに書いた文字に見る時代の変化



2011年夏の全国選手権大会で、打者が打ち上げた飛球を見上げる花巻東(岩手)の大谷翔平投手。帽子に「日本一」などとメッセージが書かれていた



野球部員らが多く使った言葉ほど大きく表示。書く予定の言葉も含む



慶応の大村昊澄主将=2023年6月30日、横浜市港北区日吉、原晟也撮影



慶応の清原勝児選手=2023年6月30日、横浜市港北区日吉4丁目、原晟也撮影



今春の選抜大会で帽子を脱ぐ清原勝児選手。つばには「自信を持ってリラックス」と書かれていた=3月21日、阪神甲子園球場、林敏行撮影

帽子を取って、つばの裏に目をやる高校球児の姿がある。ピンチのとき、チャンスとき。マウンドで、ベンチで、スタンドで。一体、何を書いているのだろう。

記者(23)も高校時代、野球部員だった。3年生だった6年前の夏、つばに書いたのは「平常心」だ。

汗を拭うために帽子を取ったとき、その3文字が目に入り、気持ちが少し落ち着いた。負ければ終わる緊張感の中、何かにすがりたかったのだと思う。たった3文字が、力を与えてくれた実感がある。

中部学院大の鈴木壯教授(スポーツ心理学)は言葉を書くことで「暗示の効果がある」と指摘する。「行動や意識を言葉のイメージへと向けることで、結果が良い方向へ向かいやすい」

いまの球児たちは、どんな言葉を書いているのか。

神奈川制した慶応の主将の選んだ言葉は?

担当した神奈川大会で開幕前の6月、出場全167チームにアンケートに協力してもらった。対

象は主将、エース投手、捕手、マネジャーの計 604 人。「帽子のつばの裏に何か書いていますか」と尋ねると、45%にあたる 274 人が「書いている（書く予定）」と答えた。

最も多かったのは「感謝」の 10 人。「絆」や「ありがとう」など、仲間や周囲を思いやる言葉が目立った。

「笑」のつく言葉は、計 23 人が挙げた。最多は「必笑」(9 人)で、「笑顔」(7 人)が続いた。「常笑」(2 人)などの造語も目立ち、元々の「必勝」(1 人)や「常勝」(0 人)より人気だった。

今夏の神奈川大会を制し、春夏連続の甲子園出場を決めた慶応の大村昊澄（そらと）主将は「日本一の主将」と書いている。

大村主将は身長 163 センチの二塁手。小学 6 年の夏、大阪桐蔭の主将で身長 168 センチの福井章吾さんが放った本塁打に目を奪われた。

福井さんは慶大に進学。慶応高に進学した大村主将は縁あって福井さんに会うことができた。謙虚な姿勢に触れ、「日本一の主将になるには人間力が大事なんだ」と実感した。

チームメートの清原勝児選手は、プロ野球で活躍した父・和博さんからかけてもらった「自信を持って」「リラックス」「センター返し」を帽子に書いている。見ると、冷静になれるという。

平塚工科の鈴木真那斗主将は、チーム行きつけの中華料理店の店名を書いた。「楽しい日々や悩んだ日々を過ごした場所。ピンチの時に見ると冷静に戻れる気がして」と話す。

四字熟語では、目的に向かって突き進む「勇往邁進（ゆうおうまいしん）」と 4 人が回答した。鉄の硯（すずり）に穴をあけるように強い意志で物事を成し遂げる「磨穿鉄硯（ませんてっけん）」、力を合わせ一致協力する「戮力協心（りくりよくきょうしん）」といった言葉もあった。

大谷翔平は「日本一」

以前はどうだったのか。朝日新聞の記事データベースで「高校野球」と「帽子のつば」をキーワードに検索した。

所蔵の 1984 年以降、最初に言葉が掲載されたのは、91 年夏の甲子園に出場した宇都宮学園（現・文星芸大付）の村上忠礼さん。「全力投球」と書かれていた。

90 年代に掲載された 54 人で最多はこの「全力投球」(4 人)で、他にも「全力」関連が 3 人。「全国制覇」(3 人)、「真向勝負」(2 人)、「弱気は最大の敵」(同)など、自分を奮い立たせる言葉が目立った。

2011 年夏の全国選手権大会などで甲子園の土を踏んだ花巻東（岩手）の大谷翔平選手（現・エンゼルス）は「日本一」などと書いている。

こうした言葉の選択について、鹿屋体育大の森克己教授（スポーツ法学）は「スポーツをめぐる文化や環境の変化と関係している」とみる。

日本の高校野球は「心身を鍛える修練の場」ともとらえられてきた。一方、近年は少子化や野球人気低下を背景に、髪形を丸刈りにするチームの割合が低下しているように、選手の自主性や個性を尊重するよう変わりつつあるという。

その結果、「スポーツの原点である楽しむことに関連した言葉」が多くなっているのでは」とみる。
(原晟也)

朝日新聞デジタル及び朝日新聞紙の他記事もご覧ください